

加藤清正の実像

慶長3年(1598)11月、朝鮮から帰国した清正は、肥後へは戻らずにそのまま上方へと向かいます。そこでは、朝鮮から帰国した諸将の間に渦巻く確執と怨嗟が、秀吉亡き後の権力争いと相俟って、一触即発の様相を呈していました。

〈18〉関ヶ原への道

慶長3年10月16日、朝鮮の蔚山城にいた清正は、日本への帰国に先立ち、肥後の百姓中に向けて「朝鮮出兵が始まって以来数年間、軍事動員などで苦勞をかけたので、年貢や労働の諸役を2、3年間は免除する」という方針を打ち出します。こうした方針を出した背景には、肥後領内の疲弊が挙げられます。朝鮮出兵では多くの百姓が非戦闘員として朝鮮へ渡り、物資輸送などに従事させられていたもので、働き手を失った村々は相当に荒廃していた状況だったと思われます。実際の戦場となった朝鮮だけではなく、朝鮮出兵を下支えした肥後の村々も大きなダメージを受けていたのです。日本への帰国を目前に控えた清正が、領内農村の立て直しと復興を最重要課題と位置付け、それに向けて強い意欲を持っていたことがうかがえます。それと同時に、疲弊によって生じた不平不満が、清正に対する抵抗運動(一揆)となってあらわれることを未然に抑え込む意図もあったと思われます。

朝鮮からの帰途博多に立ち寄った後、慶長3年12月中旬に大坂に着いた清正は、伏見城の豊臣秀頼に挨拶を済ませ、しばらくは伏見の屋敷に滞在します。

慶長3年8月18日の豊臣秀吉死去後、中央の政治体制は徳川家康、前田利家ら五大老と呼ばれる実力者大名と、石田三成ら五奉行と呼ばれる政権の実務担当者が協力して秀頼を補佐する合議体制が敷かれていました。そして、慶長4年1月に秀吉の遺言に従い、秀頼は伏見城から大坂城に移り、前田利家も秀頼の後見役として大坂城に入ります。一方の家康は、伏見の屋敷で国政にあたります。家康と利家という当時誰もが認める実力者2人が、大坂と伏見にいたことで、かろうじて権力の均衡が保たれていましたが、実力的には突出した存在であった家康と、利家ら他の大老衆や五奉行との確執・対立は次第に深まりつつありました。この不穏な状況下、清正は家康に接近して家康支持を鮮明にします。この頃清正は、浅野幸長や福島正則ら親家康派の面々と伏見の家康屋敷を守衛するなど反家康派の軍事行動に備えるとともに、虎視眈々と勢力拡大を目論む家康と姻戚関係を結びます。清正は、慶長4年4月に家康の養女である清浄院を正室に迎え入れています。

実は、この権力争いには、朝鮮出兵で生じた諸将の不満や対立が複雑に絡み合っており、清正が家康に接近した背景には、これが大きな要因だったと思われます。まず、清正らは、蔚山城籠城戦の顛末について、当時軍目付であった福原長堯(三成の妹婿)らが、秀吉に対して虚偽の報告をおこなったことを糾弾します。清正らは、この長堯らの行動は義兄・三成が仕組んだものであると断定して、その怒りの矛先は三成に向けられます。そして、慶長4年3月22日に清正、鍋島直茂、毛利吉成、黒田長政の4人は、自己の正当性と三成や小西行長の偽りを主張する長文の連判状を作成して、直江兼続ら五大老の重臣に訴え出ます。ここでの清正の言い分は、主に行長の行動に関するものであり、彼の戦闘能力の低さと偽りにまみれた数々の行動を暴露します。清正と行長の不和については、捕虜として日本に連行され、慶長4年当時は京都や伏見に滞在していた朝鮮の朱子学者・姜沆が書き残した「看羊録」という記録に詳しく記されています。それによると、両者は帰国後に講和交渉の失敗や朝鮮から撤退した経緯について激しく言い争い、お互いに「怯懦」(臆病)と罵り合ったとされ、「議論はもつれにもつれ、反目はますます深まった」と当時の様子を観察しています。清正と行長は、秀吉に仕え始めた頃より互いに相容れない関係であったと一般的には言われていますが、実は、両者の関係悪化の原因は、朝鮮出兵の過程で生じたものでした。

慶長4年閏3月3日に三成らが後盾としていた前田利家が死去すると、清正らはすぐに実力行使に出ます。利家死去の当日夜、清正をはじめ浅野幸長、黒田長政、福島正則、藤堂高虎、蜂須賀家政、細川忠興の7人が三成襲撃を画策します。事前に情報を得ていた三成は、佐竹義宣に護衛されて伏見城内の自身の屋敷に逃れ、清正らの計画は失敗に終わりますが、この事件により三成の立場は低下し、家康の政治的影響力はさらに強まります。

こうして関ヶ原へのカウントダウンが始まるわけですが、清正は慶長4年10月頃に肥後に帰国し、中央政局の情勢に目を配りつつ、領内の再建に着手します。

このコーナーは、大浪 和弥さん(元熊本博物館学芸員)が執筆しています。

